

## 渥美半島における1707年宝永地震後の社会的影響

### The social influence following the 1707 Hiei earthquake in the Atsumi Peninsula, central Japan

村岸 純<sup>1\*</sup>

Jun Muragishi<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup>首都大学東京・都市環境・地理

<sup>1</sup>Geography, Tokyo Metropolitan Univ.

宝永地震は江戸時代中期の宝永四年十月四日（1707年10月28日）に発生し、東海地方から四国・九州地方の太平洋側を中心に広範囲に被害を与えた巨大地震である（宇佐美，2003）。宝永地震の被害に関しての研究は多数なされているが、歴史史料を用いた地震後の長期的な影響の研究は多くはない。本研究では市町村史等の歴史史料を用いて宝永地震後の渥美半島への影響を考察する。

三河湾沿岸の畠村（現、田原市福江町）では史料によると地震後に石高の減少がみられる。また、元文三年（1738）の指出御帳（『渥美町史資料編上巻』所収）には、石高減少だけではなく海岸浸食による影響が記されている。当時の人々が、海岸浸食に対し秋葉社を勧請して浸食防止の祈願をしていた様子が見られる。

次に太平洋側の赤羽根中村（現、田原市赤羽根町）の石高変遷をみる。『赤羽根の古文書 近世史料編』所収の各年代の免状より年貢の免除がされている項目を比較した。石高に毎年変化がみられるが、1700年代後半より減収が目立っている。畑作と稲作の比較をみると稲作の年変化が激しいこともわかる。稲作への影響が大きいようである。浜辺が欠けたところがあったこともわかる。この海岸の浸食の対応として、畠村と同様に秋葉社を勧請している。大規模に欠けたのではなく段々欠けたという認識が史料からうかがえる。赤羽根中村で、地震前にも年々海岸浸食の影響を受けていた。地震が崩壊のきっかけとなりその後田畑が減少するほどの影響が出るようになった。この農地は後の時代まで回復されないままであった。

浸食については地震や津波の直接の影響で被害が発生したものと、地震によって段丘崖の端に亀裂が入りその後の台風や高潮等によって崖が崩れ段丘上の農地を喪失させたものがあったと考えられる。

遠州灘側と三河湾側の両地域で秋葉社を勧請して浸食対策の祈願をしていた。この地域では、火防の神の力を借り浸食に対応しようとする共通の信仰が明らかになった。

大地震の被害は地震動や津波の被害だけではない。地震により海岸線の変化が生じた。この海岸線の変化が農地の減少を引き起こし社会へ影響を与えた。地震直後の被害だけではなく地震によって引き起こされた環境変化の影響が地震後人々や社会へ影響を与えることが明らかになった。

キーワード:宝永地震,歴史地震,渥美半島,海岸浸食,歴史史料

Keywords: Hiei earthquake, Historical earthquake, Atsumi Peninsula, Coastal erosion, Historical materials